

○10 能登半島の鯨類遺跡から出土した哺乳類骨の種構成と人骨の炭素・窒素安定同位体比

平口哲夫（金沢医科大学）

The species composition of mammal bones and stable carbon/nitrogen isotopic values for human bones excavated from the cetacean sites on the Noto Peninsula, Central Japan.

Tetsuo Hiraguchi (Kanazawa Medical University)

本発表は、能登半島または近隣の縄文時代遺跡から出土した哺乳類骨の種構成と人骨コラーゲンの炭素・窒素安定同位体比 ($\delta^{13}\text{C} \cdot \delta^{15}\text{N}$) を比較することにより、鯨類をどの程度食用としていたかを検討する。考察の主対象となる $\delta^{13}\text{C} \cdot \delta^{15}\text{N}$ は、真脇遺跡・赤浦貝塚・上山田貝塚人骨の分析結果 (Hiraguchi et al, 1991) と三引貝塚人骨の分析結果 (米田, 2005) である。

真脇は能登半島先端部の富山湾側に位置し、水産動物遺体の種構成は外洋性の傾向が強く、貝塚は形成されていない。これに対し、赤浦は七尾湾の東湾岸に位置する主鹹貝塚、三引は七尾湾の西湾最奥部に位置する主鹹貝塚、上山田は日本海に通じる河北潟に面した主淡貝塚である。

真脇、赤浦、上山田の哺乳類種構成は個体数法により (平口, 1986・1992)、三引の哺乳類種構成は整理途中のため破片法により提示した (平口, 2004)。これらのデータにより陸生哺乳類と海生哺乳類を比較すると、真脇 6.9% : 93.1%, 赤浦 82.1% : 17.9%, 上山田 90.2% : 9.8%, 三引 91.5% : 8.5% となる。この百分率は、遺跡の水域環境をよく反映している (平口, 2005)。海生哺乳類を多食するほど $\delta^{13}\text{C} \cdot \delta^{15}\text{N}$ は高い数値を示すので、上記 4 遺跡出土人骨の $\delta^{13}\text{C} \cdot \delta^{15}\text{N}$ は真脇が抜きん出て高く、赤浦・上山田または三引の順に続くと思われた。しかし分析結果は、 $\delta^{13}\text{C} : \delta^{15}\text{N}$ が真脇 -17.0‰ : 12.0‰, 赤浦 -17.3‰ : ? , 上山田 -18.5‰ : 8.2‰, 三引の分析 No.1 試料 -17.3 : 12.7 という、予想に反した近似値を示した。ただし三引では、分析 No.2 試料 -22.0‰ : 2.6‰, No.3 試料 -21.3‰ : 4.7‰, No.4 試料 -21.5‰ : 14.1‰, No.5 試料 -23.1‰ : 7.7‰ という“異常値”とみなされた分析結果もある。

真脇の $\delta^{13}\text{C} \cdot \delta^{15}\text{N}$ が予想ほど高くないのは、1 漁期の捕獲頭数が見かけほど多くはないにもかかわらず、他集落へ広範囲に分配されたからだと解釈することができる。一方、三引の“異常値”については、哺乳類種構成の主体をなすのがシカであるという事実が示唆しているように $\delta^{13}\text{C} \cdot \delta^{15}\text{N}$ を下げる堅果類などの C3 植物の食料に占める割合が高かった可能性や、測定試料が他地域からの一時的な滞在者のものであった可能性も考えられる。いずれせよ、遺跡出土人骨の $\delta^{13}\text{C} \cdot \delta^{15}\text{N}$ の分析例を増やして、統計的な信頼度を高める必要がある。